

季刊

Darjeeling Days

Volume 02

特集

旅の記憶

Darjeeling Days

Volume02



CONTENTS

03 特集

旅の記憶

- 04 I. 旅の記憶を手繰る
- 05 II. 最初の旅の記憶
- 07 III. 旅の記憶を辿る
- 11 IV. 旅グルメの記憶
つる幸
- 11 V. 旅の記憶
北ハツ彷徨 山口耀久
- 15 VI. 旅の記憶を引き出す音
- 19 VII. 旅の記憶の残し方
Travelars Note
- 17 VIII. Travel Photography
瀬戸内島巡り

02 スナップの楽しみ

- 被写界深度の魔術
- 27 花図鑑
彼岸花
- 29 茶の快樂
東方美人
- 30 旅する気分になれる場所
IMA Concept Store
- 31 カフェ巡り(2) 旅先のカフェ
umie
- 32 旅のスイーツ No.2
富山銘菓 月世界
- 33 今日一枚
昼下がりの男木島にて
- 34 Voice From Editor





スナップの楽しみ

被写界深度の魔術

それは高校2年の夏休み、初めて参加した写真部の合宿でのことだった。戸隠牧場の白い花の咲く一角でモデルをしてくれるというクラスメイトを被写体に、シャッターを切った。35mm F1.7の明るいレンズを装備したYASHICA Elector35というレンジファインダーカメラを家から持ち出し、先輩に言われるがままにKodak Tri-x400(モノクロフィルム)を詰め込んでいたが、それまでちゃんとカメラの使い方を習ったことがない僕は、いざ撮る段になってカメラのセッティングすら解らず、オートらしきモードでただただシャッターを切るだけの状態だった。

その時、突然頭の上から「ポートレートはね、女の子の手前側の瞳にフォーカスして、絞りを開放で撮るといいのよ。被写界深度*が浅いのでピント合わせは慎重にね。」という言葉が降ってきた。まほ先輩のアドバイスだった。僕はその時初めて「被写界深度」という魔法の言葉を知った。それ以来、浅い浅い被写界深度をこよなく愛し、ボケのある写真を量産する日々が37年も続いている。

*被写界深度:焦点を合わせた被写体の前後でピントが合っているように見える範囲。被写界深度が浅いほどその範囲は狭くなって周りが見えなくなる。つまり、絞りを開放(レンズのF値を一番小さくする)にすると、周りがぼけてピントを合わせた部分にのみピントがあって、いい感じの写真になるのです。

特集

旅の記憶

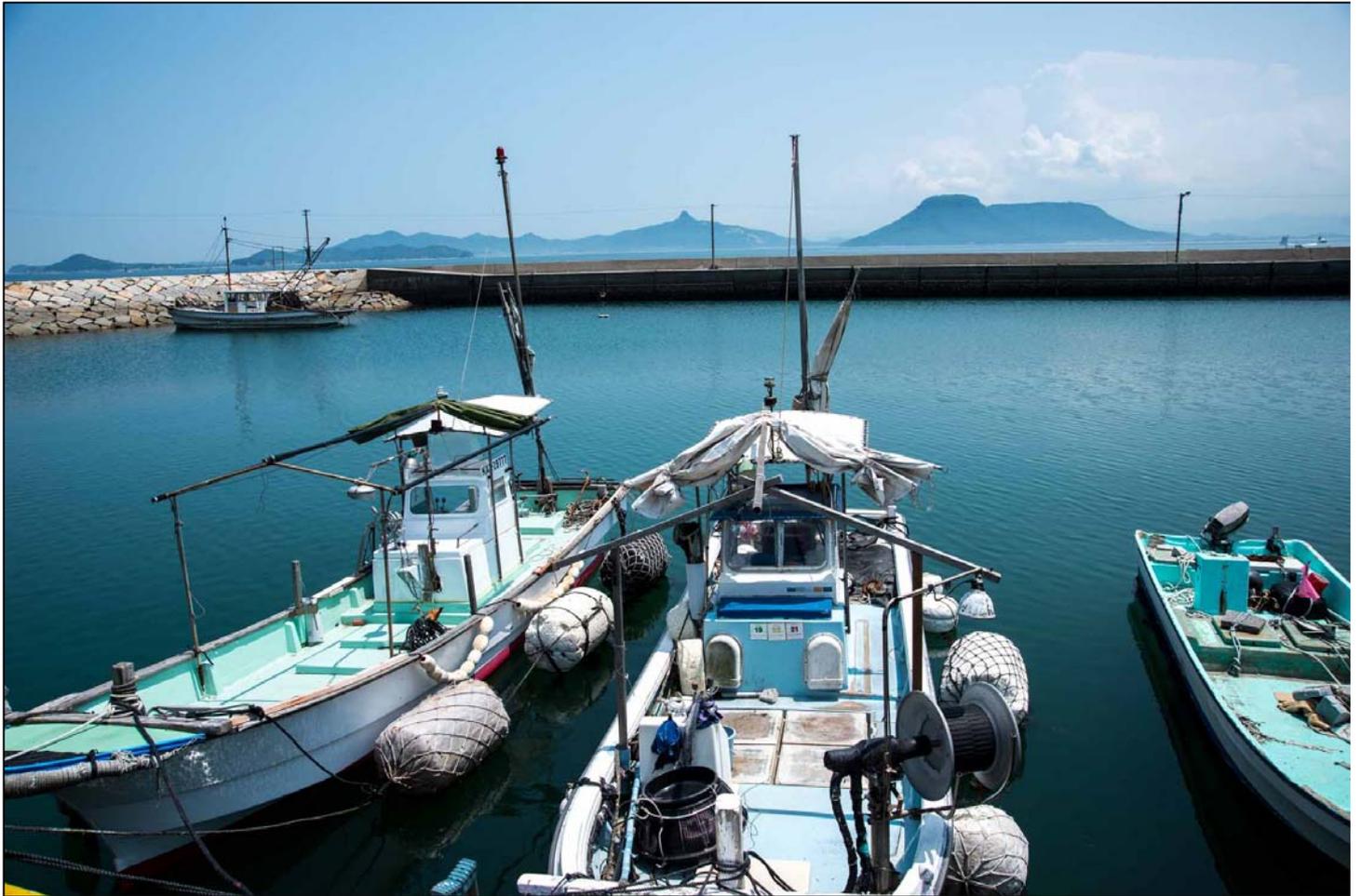
旅から帰ってくると、その思い出は楽しかったことも含めて段々と薄れて行き、いつの間にか、普段思い出すことのない事象へと変換されてしまう。それは、何かのきっかけでふと思い出したり、わざわざ記憶の狭間を探しに行って思い出すという感じになる。どこかの記憶の引き出しにしまいこまれたそんな旅の記憶を、時にはひっぱり出してきて虫干ししてあげるのもいいかもしれない。

僕の中にはどんな旅の記憶が格納されているだろう？



1. 旅の記憶を手繰る

今までの旅を思い出してみる



今までどんな旅に出ただろう？

そんなことを考えてみた時、すぐに蘇る旅とは、一体僕にとってどんな旅だったろう。

まだ幼かった頃に家族と出かけた旅かもしれないし、あるいは学生時代にふらりと出た一人旅、あるいは新婚旅行だったかもしれない。いつどんな時に誰と行ったのか、すぐに思い出せない場合もあるし、あるいは何時行ったのかも定かではない旅もあるかもしれない。確かにあそこに行ったはずだとか、再度訪問してみて、以前ここに来たことがあるぞと思い出すような、そんな旅の記憶もあるかもしれない。

そもそも旅なんて定義は、人の数ほどもある。「非日常的日常。」「新しい出会いがあれば、そ

れが旅」、「未知との遭遇」、「自分がいつも生活している日常エリアを越えたら、それが旅」という人もいる。少なくとも、そこには移動が伴うし、日常ではない時間を送ることだし、新しい出会いがあるものだろう。そんな体験を、いままでいったい何度してきたんだろう。

そして旅の記憶は、それを呼び起こす触媒とセットとなっている場合が多い。たとえば、ある音楽を聴くと、それが旅の記憶を引き出すことがある。あるいは何かの香りをかぐことで、旅の記憶が呼び覚まされることもある。その触媒は一枚の写真かもしれないし、あるいは一冊のノートかもしれない。

まずは、いままで行った旅について、洗いざらい手繰って、「旅の記憶」を呼び起こしてみよう。



古の軽井沢駅（信越本線）

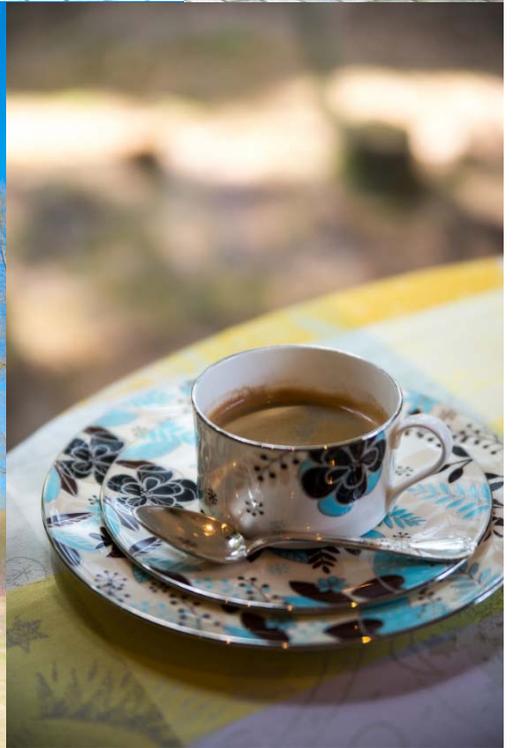
II. 最初の旅の記憶。

はるか遠い信越線の旅。

自分の中の一番古い旅の記憶は、いったい何だったんだろう。一生懸命頭の中を探ってみても、はっきりしたことはわからない。かろうじて、旅の記憶の断片のいくつかを発見することができるぐらいだった。その断片の一つに上野から長野へ向かう「信越線」に乗ったという記憶がある。長野県須坂市、それが母の故郷だった。おそらく夏休みを利用して、母の里帰りに連れていかれた記憶なんだろう。垂直の背もたれと4人掛けの座席には、両親と姉が座っていたはずだ。高崎を過ぎると次第に妙義の山が近くに迫り、二重に連結された機関車が、喘ぐように客車を引きながら碓氷峠の急勾配を登っていく記憶。そして横川の峠の釜めしや、軽井沢を超えると見えてくる浅間山の美しい山影。何度も繰り返し須坂へは出かけたので、それらの記憶は多分重層的に積もったものが一つの塊として思い出されているのだと思うのだが、やはり最初の旅は信越線の旅だったに違いない。

特に碓氷峠から軽井沢への幾重にも続くトンネルや高いレンガ造りの架橋は、思い出すにつれ、郷愁を伴って懐かしい *impressive memory* となっているのである。

ふと、同じ旅を追体験したいなと思ったが、いまでは、信越線でトレースすることはできない。長野新幹線が開通したために、横川－軽井沢間はすでに廃線となり、JRに代り「しなの鉄道」が軽井沢－篠ノ井間を走っているからだ。懐かしい記憶は、そのまま記憶として保存しておくのがいいのかもしれない。



旧軽井沢・酢重正之商店
<http://www.suju-masayuki.com/>

星野温泉 トンボの湯
<http://www.hoshino-area.jp/tonbo/>

Le Belcoeur(軽井沢)
<http://www.belkaruizawa.com/>



東茶屋町（金沢）

Ⅲ．旅の記憶をたどる

山口、修善寺、そして金沢

夏も終わりに近い平日の昼さがり、京都で用事を済ませた僕は、琵琶湖を回る湖西線の特急サンダーバードに乗り込んだ。乗り込む前にスターバックスで買ったハウスブレンドと車内販売のアイスクリーム。茶友の青柳さんに教わったこの組み合わせと共に、右側の車窓を流れていく琵琶湖の風景をしばし楽しんだ。京都から金沢までの約2時間ほどの汽車旅は、真白い夏の日差しの中を駆け抜ける、何も考えずにいられる静かな時間だった。

思えば、国内はあちこち旅をしてきた。北は北海道、南は沖縄まで。もちろんまだ足を踏み入っていない県もいくつかあるが、やはり歴史を感じる町並みが残る土地を訪れるのが好きだった。ずいぶん昔「小京都」と呼ばれる土地を訪ねる旅が流行ったが、まさに小京都をめぐる旅が好きだったのかもしれない。

たとえば、こじんまりとした街だったにもかかわらず、落ち着いた雰囲気魅せられたのが西の京と呼ばれる山口だった。瑠璃光寺の五重塔、苔むした豊栄神社、明治の洋館の面影を残す山口県庁舎など、小さな町に様々な見どころが満載だった。穏やかな風をまとった街、そんな印象がとても心地よかった。

そして、開湯1200年を超える伊豆修善寺。木造の旅館や竹林の小径、温泉街を流れる



JR山口駅



豊栄神社（山口市）



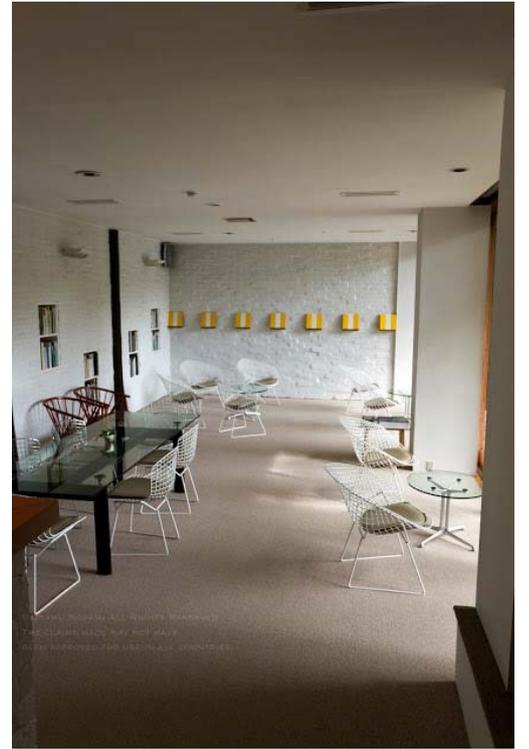
瑠璃光寺薬師堂（山口市）



あめ湯がおいしかった



瑠璃光寺五重塔（山口市）



清流などが醸成する和情緒は「伊豆の小京都」と呼ばれる。そんな場所柄は勿論のこと、修善寺を好む最大の理由は、なんといっても「あさば」という旅館が素晴らしいからの一言に尽きる。質素な中に品の良さを秘め、日本の伝統美を重んじた設えなどと共に、そこには心温まる「もてなし」があった。

そして何よりも、旬の食材を使った料理の数々は、素朴でありながら本物の上質を提供してくれる。さすが、『西の俵屋、東のあさば』と言われる憧れの旅館だというのもうなづける。





割烹高橋（金沢）

気が付くと、福井を駆け抜けたサンダーバードは、白山を右手に加賀温泉を過ぎたところだった。京都に次いで好きな金沢は、どこか武骨で底に秘めた力強さを感じる街。それでいて京都よりも人懐っこく、どこかほっこりと心休めることができる街でもある。

金沢に到着したら、まずは宿に荷物を置いて、ふらりと近江町市場から東茶屋町に足を伸ばしてみることにしよう。東茶屋町では一笑でおいしい献上加賀棒茶と和菓子を楽しみながら、今夜のおいしいご飯処の情報を仕入れるのだ。日本海の恵の恩恵を受ける街・金沢に来たからには、おいしいものに舌つつみを打たないわけにはいきまい。ただ、酒が飲めないことだけが残念でならないのだけれども。

山口、修善寺、そして金沢。小京都は、いまだに僕を魅了してやまない。





Ⅳ. 旅グルメの記憶

最高の夕食に出会った日

初めて料亭なる場所にデビューしたのは、もう今から9年ほど前。とある会社の社長さん達に、加賀百万石の名店、いや、日本中にその名をとどろかせているとあっていい料亭である『つる幸』に連れて行ってもらったのだった。高級な茶室の一角に膳が並べられたような部屋は、床の間の飾りが質素で美しかった。出された料理が意外とモダンで、でも、とてもおいしかったこと、日本酒天狗舞が本当に口に合うのに酒が飲めなくて悔しい思いをしたこと、そして東茶屋町の芸子さんたちと一緒に太鼓をたたいたことなどがしっかりと記憶されている。

しかし、それ以来、「金沢＝つる幸」というぐらい頭の中でその存在が大きくなってしまったわけで、絶対にまた行くのだと、心に誓っていた。





つる幸

住所：石川県金沢市高岡町6-5

電話：076-264-2375

営業：11:30～15:00, 17:00～22:00

定休：不定休



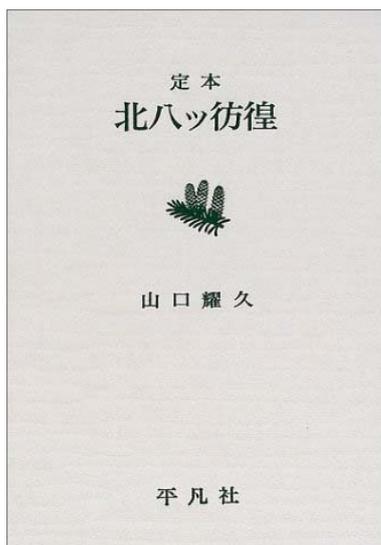
そのつる幸に再訪が叶ったのは2年前のこと。雪の降る寒い冬の日だった。せっかく金沢に行くのだからと、えいやと清水の舞台から飛び降りるつもりで(まあ、そこまでではないが)、予約をお願いしてしまった。いちげんさんお断りというわけではないので(東茶屋町には京都同様いちげんさんお断りの茶屋がある)、とても丁寧に予約を受け付けてくれた。

その年の3月に火事があったのだが、その面影はなく、9年前の訪問の記憶とほぼ同じ店構えで、2階の個室も綺麗にはなっていたが、ああ、こんな店だったなという雰囲気には変わりは無かった。

この店の売りは、何といても新鮮かつ旬な食材だ。それを質素にかつおいしく料理して出してくれる。旬の魚介は勿論のこと、旬の野菜や果物の一つ一つまで目配りが行き届いている。そしてその食材の持つ味を素直に丁寧に引き出しているのが本当にうれしい。さすが二代目板前の河田康雄さん、「大阪の味吉兆」で修行されただけはある。更に大女将と若女将二人とも挨拶に来てくれて、歴史ある料亭のサービス精神も味わうことができた。まさに最高の夕ご飯を味わった夜だった。



V. 旅の記憶：北ハツ彷徨



『定本 北ハツ彷徨』

著者：山口耀久
出版：平凡社（2001/10）
ISBN-10：4582829724
ISBN-13：978-4582829723
発売日：2001/10

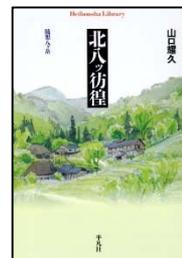
まだ20代だったころ、甲斐大泉にあったドンキーハウスというペンションを基地に、ハヶ岳のあちこちを歩いたり、四駆で走ったり、オートバイを駆ったりしたものだった。ハヶ岳は、アウトドア好きの若者にとって、格好の遊び場だった。

北ハヶ岳では四季を通じてキャンプやクロスカントリースキーをしたものだった。デイパックにバゲットとチーズを忍ばせ、白駒池、双子池、大河原峠を歩き、森のなかで珈琲を愉しむ、そんな上質の時間を満喫した。今から考えると、なんて贅沢な時間だったんだろう。

そんなフィールドだった北ハヶ岳を、僕らよりもずいぶん前に楽しんでいたのが、山口耀久だった。そのことを知ったのは、ペンションドンキーハウスの本棚に収められていた一冊の本。

『北ハツ彷徨』とタイトルにあるこの本には、著者 山口耀久の山行記をはじめ、北ハツを歩き回った記録が綴られていた。当時山を歩く者たちの多くがインテリで、こうして残された文章にも、哲学的思惟があちこちにちりばめられ、20代の若者にはとても刺激的だったことを思い出す。

当時絶版だったこの本を神田の悠久堂書店で見つけたときは、本当にドキドキしたものだった。創文社アルプ選書（昭和36年4月発行）の一冊だった。一冊1万円もした本をその場で迷いもせずを買ってしまったことは、間違えではないと思っている。そしてその一冊はいまだに本棚の手の届くところに置かれている。この本を紐解くたびに、あの若かったころの山遊びの記憶が呼び起こされる。大切な大切な一冊だ。



2008年に平凡社ライブラリーに収められる形で復刻し、今では手軽に読めるようになった。

北ハツ彷徨
著者：山口耀久
出版：平凡社
(2008/03)
発行：2008年3月
ISBN-10：4582766374
ISBN-13：978-4582766370



*Mt. Akadake (Yatsugatake) 1986
Contax T, Provia100*



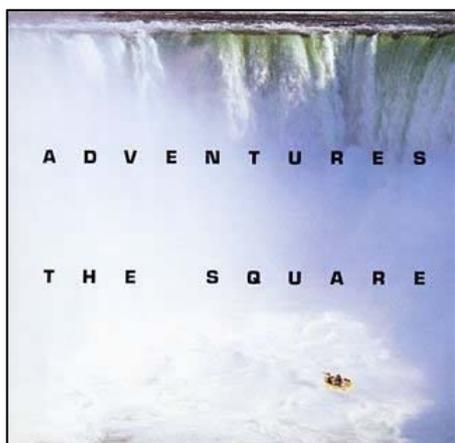
*Asaba at Syuzenji
Nikon D800, TAMRON 70-200mm F2.8*

VI. 旅の記憶を引き出す音

記憶は時として音によって引き出されることがある。その曲を聴くと、記憶にしまい込まれていた情景がふとよみがえったりする。

旅に出たときに聞いた音だったからなのか、その旅をした時代に流行っていたからなのか、音楽と旅は深く結びついているのだ。そんな個人的な音を取り上げてみた。

「ADVENTURES」 The SQUARE



言わずと知れた日本を代表するフュージョンバンドの最高傑作。1984年にリリースされ、サントリーのCM曲にもなったので、おじさん、おばさんたちには懐かしいアルバムではないだろうか。

壮大なメロディーの「Adventures」で始まり、底抜けの明るさを持つ「All About You」、ジャジーな雰囲気「Night Dreamer」、哀愁漂う「Cape Light」、マイナーキーで歌い上げる「Travelers」等、旅情をそそる曲が凝縮されたアルバムだ。

当時、矢作俊彦・司城志朗の名作『暗闇にノーサイド』の新書版とこのアルバムをセットに、信州各地の温泉巡りをしたものだ。特に北信の山田温泉や草津に近い尻焼き温泉などをYAMAHA SR400でめぐって歩いては、伊東たけしのメロウなサクソフやLyriconの音に酔いしれたものだ。

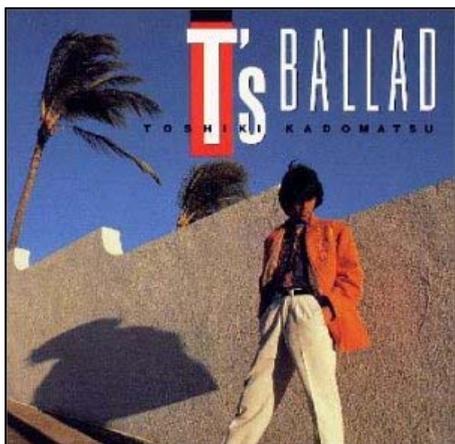
温泉とフュージョン、あんまり似合わない組み合わせのような気もするのだが、僕にとっては遠い記憶を呼び覚ます温泉アルバムなのである。

■ CD (B00005R6KK) : ¥ 2,012 (Amazon調べ)

発売元：ビレッジレコード

<http://www.youtube.com/watch?v=UxNljGWwK24>

「T's BALLAD」 角松敏生



角松敏生のそれまでのアルバムからバラード曲を集めたコンピレーションアルバムだ。先日の全国ライブツアーでも、ここに収録された曲を数曲歌ってくれた角松だが、このアルバムを聴くと、友人や同僚と一緒に、奥志賀高原や白馬に何度も足しげく通った時のことが思い返される。車のCDチェンジャーにはいろんなアルバムが入っていたはずなのに、何故かこのアルバムばかりをかけまくって、運転しながら歌ってた。特にこのアルバムのオープニング曲OVERTUREとエンディングのNO END SUMMERを聞くたびに碓氷峠を避けて鳥居峠を越え、さらに菅平から須坂を抜けてそこから雪を求めて五竜とおみスキー場まで車を走らせた日のことが、昨日のことに蘇ってくる。まさに青春の凝縮された一枚なのである。

■ CD (B00005EIDK) : ¥ 2,339 (Amazon調べ)

発売元：BMGビクター



「Tony Bennett & Bill Evans Album」

社会人になって最初の夏休み。友人と二人で信州をツーリングした際に、聞いていたアルバム。このアルバムの最後から2曲目に入っているBut Beautifulという曲を聴くたびに、戸隠高原のキャンプ場が思い出される。

「Love is funny or it's sad, Or it's quiet or it's mad, It's a good thing or it's bad, But beautiful」、そう歌うTony BennettのスイートなヴォーカルがBill Evansの美しいピアノに乗って広がっていく素晴らしい曲なのである。

3rd Album

■ CD (B000J233MG) : ¥ 1,418 (Amazon調べ)

発売元：Fantasy



VI. 旅の記憶の留め方

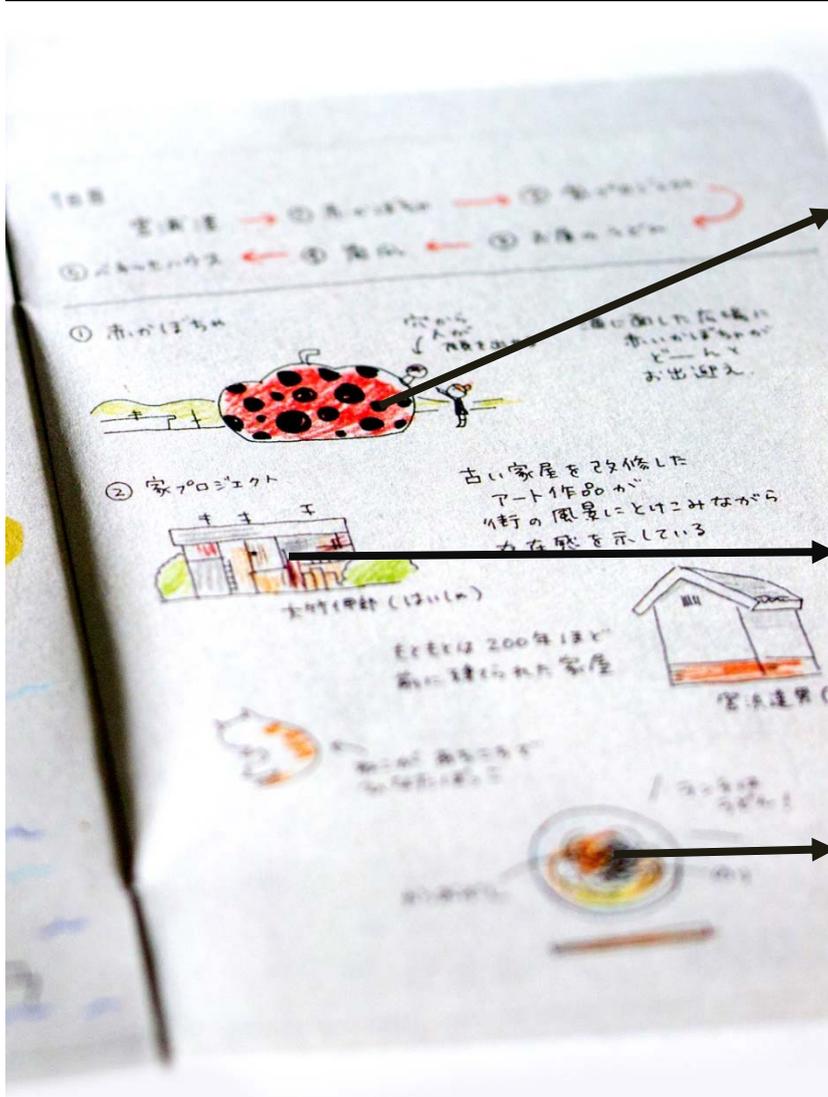
旅は終わると、その記憶は徐々に薄れて行ってしまふ。それを何かに留めておけば、忘れたとしても記憶を掘り起こす触媒になるはずだ。もちろん、旅の留め方にもいろんなやり方がある、写真を撮ったり旅ノートをつけることもその一つだろう。

旅ノートの場合は、どんなノートを利用するのかで結構悩んだりしてしまうものだが、今では様々な旅ノートのための手帳が発売されているので、自分なりのものを作ってみると面白い。

僕は最近仕事でもプライベートでもミドリカンパニーのMDノートを愛用している。新書版サイズのMDノートは、コンパクトでなおかつ書きやすい。まさに旅ノート向きだといえるだろう。

さらに、「Travelers Note」や「TRAVELING EDiT」というノートも発売されており、自分なりの旅の記録をデザインするには、とても使い勝手が良い。

あとはいかに自分なりの使い方をするか。まあ、それが一番の問題なんだけれどね。



赤カボチャ

ここに来ると皆、思い思いにポーズを撮りたくなるから面白い。



はいしゃなぜこれが歯医者なのか全然わからないけれど、小さなアートミュージアムとして楽しめる面白い建物だ。



カフェ ランチ

島内にはいくつかのカフェがあり、ランチが楽しめる。この日はなぜかカレーが無性に食べたくなった。



Hassel Blad 503CXi

草間彌生 作 赤カボチャ(直島)

VII. *Travel Photography*

旅の記憶を引き出すための旅の記録。

今回は、この夏に旅した瀬戸内島巡りの旅記録である。



Hassel Blad 503CXi
高松港 直島行高速船乗り場



Hassel Blad 503CXi
直島 本村港



Hassel Blad 503CXi
Naoshima Honmura Café Salon Naka-Oku (直島)



Hassel Blad 503CXi
家プロジェクト「はいしゃ」(直島)



Hassel Blad 503CXi
高松-男木島を結ぶフェリー「おめん」



Hassel Blad 503CXi
男木島の猫たち



Hassel Blad 503CXi
高松港のランドマーク的オブジェ



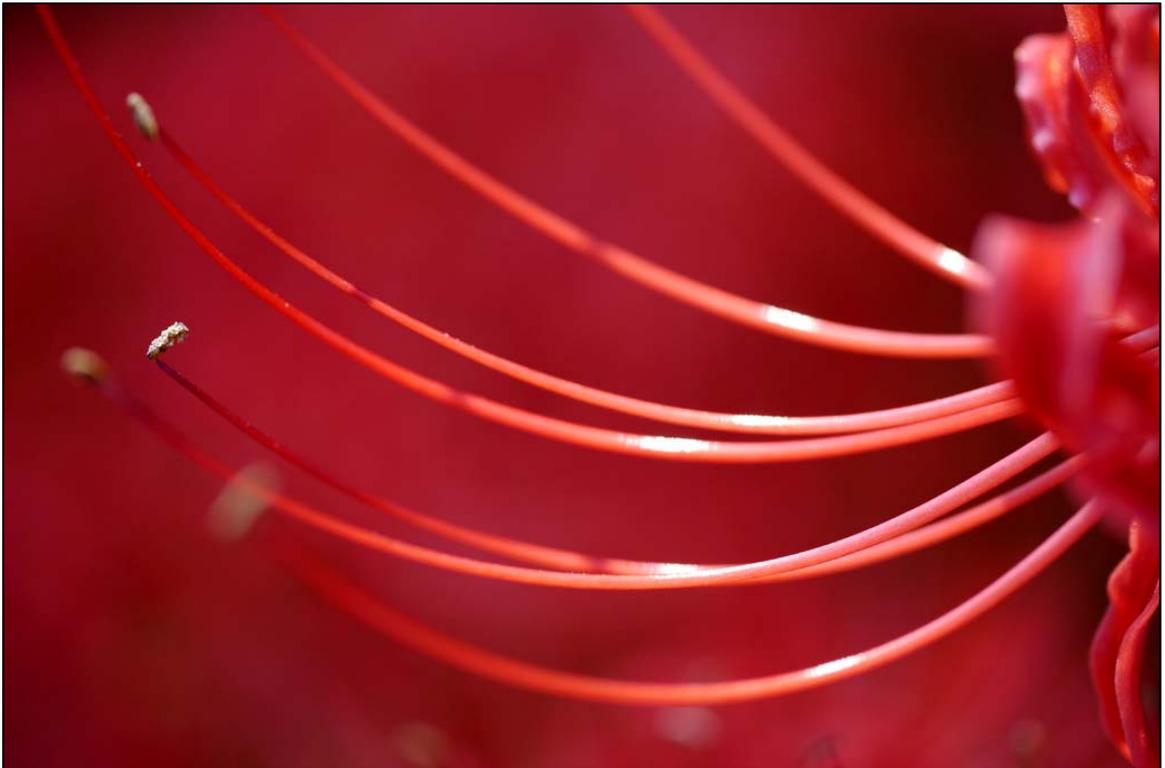
[季節の花を楽しむための写真図鑑]

花図鑑 彼岸花(曼珠沙華)

彼岸花ヒガンバナ(彼岸花、学名 : *Lycoris radiata*[1])は、ヒガンバナ科ヒガンバナ属の多年草である。クロンキスト体系ではユリ科。リコリス、曼珠沙華(マンジュシャゲ、またはマンジュシャカ サンスクリット語 *manjusaka* の音写)とも呼ばれる。学名の種小名 *radiata* は「放射状」の意味。

韓国では「相思花상사-화」という美しい名前では呼ばれている。

(Wikipediaより)





[茶の快樂:その2]

夏の名残の『東方美人』

台湾の新竹や苗栗などで作られる薫り高い烏龍茶。真偽のほどは確かではないが、大英帝国のビクトリア女王が献上されたこの台湾烏龍茶を淹れ、茶葉がコップの中で上下にジャンピングする姿が美しく舞い踊る美女のようだと感動し、「オリエンタルビューティー」(Oriental Beauty)と呼んだという逸話も残っている。たしかに、そのDarjeelingにも味わいは、夏の過ぎ去った後のこんな時期に楽しむのが似合っている。

旅する気分になれる場所

IMA Concept Store



IMA Concept Storeは、写真のプロが作った、まるで旅するように写真を楽しめるスペース。「写真と暮らす」をコンセプトにギャラリー、ブックストア、カフェの3つの機能を一つの空間で緩やかに分けてある。様々な写真家の写真展を楽しんだ後、ブックストアでお気に入りの写真家の写真集を眺め、そして三茶の名店 *café obscura* の手がけたカフェでおいしい時を過ごす。ファッション、インテリア、音楽、建築、グルメなど、ライフスタイルにこだわりを持つすべての人々が楽しめるが、写真好きにはたまらない場所といえるだろう。

なお、ここで販売されている『IMA~LIVING WITH PHOTOGRAPHY~』は、写真をゆっくり読むをテーマに編集されたセンスあふれる雑誌。古今東西の素敵な作品を親しみやすく解説しているのので、ぜひ読んでみてほしい。

IMA Concept Store

住所：東京都港区六本木5-17-1 AXISビル3F

電話：03-5572-7144

営業：11:00-22:00

定休：不定休

<http://imaonline.jp/list/imaconceptstore>



旅のカフェ
umie



umie
ウミエ

住所：香川県高松市
北浜町3-2北浜alley-h
電話：087-811-7455
営業：11:00～23:30
定休：不定休

瀬戸内島巡りの宿を高松に取ったので、高松の面白い場所も見ておきたいと連れて行ってもらったのが「北浜alley」だった。ここは、高松港よりやや東側にある古い倉庫を改造した施設。横浜の赤煉瓦倉庫と似たような、でも、それよりも明確に若者向け施設としてリノベートする意思が感じられる場所だった。

この北浜alleyの一角の二階にあったのが、umie(ウミエ)というカフェだった。店内はいくつかのパートに分かれており、いい感じに雑誌や本が並び、友達の家や書斎に遊びに来たかのような感じのとてもくつろげる空間となっていた。テーブル席やソファ席、日中なら港が見下ろせるカウンター式の席と、その日の気分に合わせて座る場所を選べるのも魅力の一つ。

旅先の夜に、一人ふらりと彷徨込むには打ってつけのカフェといえるだろう。

富山といえば、これしかない！

銘菓 月世界



富山 月世界本舗

電話：075-231-1658
住所：富山市上本町8-6
営業：10:00～17:00
定休：土曜日、日曜日
売店：とやま駅特選館など



富山県の銘菓「月世界(つきせかい)」を初めて食べたのは、15年以上前のニフティーサーブというパソコン通信時代、茶の文化フォーラムのお茶会で出された時だった。見た目は白い落雁なのだが、手に持つとふんわりと驚くほど軽い。そして口に入れると軽くサクサク、そしてすうっととけるような口当たり。甘く卵菓子のような味わいが口の中に広がる。原料は和三盆と白双糖、新鮮な鶏卵と寒天。抹茶の苦みにも、珈琲の苦みにも合う菓子なのだ。勿論富山には石谷もちやのささぎ餅とか、ささら屋のしろえびせんべいとか、ほかにもいろいろと有名な和菓子がある。だけど、「暁の空の淡い月影と美しい表情」を名前の由来に持つ「月世界」は、パッケージの月を見上げるウサギの絵とともに、軽い食感と口に広がるやさしい味わいが素晴らしく、僕の菓子ランキング中では不動の上位に位置するのだ。

去年の夏に富山大学に講義に行った際にも、駅の売店で真っ先に購入したのが、この菓子だった。普通だと、その土地の老舗の重厚な店舗にわざわざ買いに行くような和菓子が好みではあるのだけれど、この月世界は駅の売店で買ったとしても、**富山銘菓「月世界」**なのである。



Nikon D800,
Ai AF Zoom-Nikkor 24-85mm f/2.8-4D IF f/8,1/500秒 26mm

今日一枚

高松からフェリーで約40分。直島の南東に位置する男木島。海が青く揺蕩う穏やかな港は、まさに正しい日本の田舎の表情をしていた。静かな夏の昼下がり。島猫たちも体を寄せ合って日陰で昼寝に興じている、そんな時間。僕たちは、汗をかきながらカメラを何台も抱えて、どうにかこの穏やかな表情を切り取ってやろうと、悪戦苦闘していた。でも、そんな時間は、僕たちにはとても愛おしい時間だった。表紙の写真もこの港でこの時に撮ったものである。

ちなみに、表紙と裏表紙の人形を、僕は「くるりん」と呼んでいる。



「瀬戸内暮らし」

瀬戸内の島々の心地よい日常が垣間見れる、そんな雑誌が「瀬戸内暮らし」。瀬戸内に暮らす幸せ、見つけに行こう!をコンセプトに、島へ通いながら、自分たちの目で見、足で訪ねた情報を、せとうちの風とともに紡ぐ素敵なマガジンです。

出版社：ROOTS BOOKS

<http://setouchikurashi.jp/>



Voice From Editor

7月の中旬にカメラ仲間と瀬戸内島巡りをしてきました。穏やかな日本の正しい田舎の風景を見ながら、そういえば、島旅って、この前はいつしたっけなど、記憶を辿ってしまいました。忘れないだろうと思っても、さらに様々な時間が折り重なって積もると、その旅もどこかに仕舞い込まれてしまい、記憶の引き出しをさがさざと探してこないと見つからないことも多くなったなあ、最近になって思うことがあります。僕にとって初めての旅はどこに行ったのだろう？一番好きな旅先はどこだっただろう？そんなことをあれこれと考えながら風景をカメラに収めていきました。

旅の記憶、懐かしいものもあれば、郷愁を伴うものもあれこれ体験してきた今だからこそ、旅は記録するのではなく記憶すべきものなのだとと言えるような気がします。つまり、上質な旅さえ

すれば、記録しなくても、それは記憶されるものなのです。それは、音や香りなどのふとした触媒によって引き出されて、懐かしい気持ちにさせてくれるもの。だから、今回は、前回の続編のような旅について、しかも、過去体験した旅の記憶について取り上げてみました。

さて、次号は、冬号を目指して、また楽しい作業をしていく予定です。

企画、編集、撮影 平田公一



季刊 *Darjeeling Days*

第1号は、ネットからPDAファイルでダウンロードいただけます。

<http://tearecipe.net/dd/>



瀬戸内 男木島 漁港
高松から40分の小さな瀬戸内海の島。

季刊 *Darjeeling Days*
Volume 02

発行日:2014年9月25日
発行人:平田公一
<http://www.tearecipe.net/>
